

授業「キャンプ実習」に関する研究(3)

—3ヶ年の基礎研究比較と総合評価—

中村 哲士, 保井 俊英, 會田 宏, 小柳 好生, 松本 裕史
田中 繁宏, 四元 美帆, 西坂 珠美, 野老 稔

(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

Research on the Lesson of “Camp training”(3)

—Comparison of Basic Researches into Three Years and Comprehensive Evaluation—

Tetsushi Nakamura, Toshihide Yasui, Hiroshi Aida, Yoshio Koyanagi,
Hiroshi Matsumoto, Shigehiro Tanaka, Miho Yotsumoto,
Tamami Nishizaka, Minoru Tokoro

*Department of, Health and Sports, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

This research of the third stage executed mainly the comparison of the basic researches into three years. The chief purpose was clarification of a universal part of three years.

The results were summarized as follows:

1. The reason for participation was “Cheap expenditure” and “Course credit”. The expected program was “Observation of constellation” and “Outdoors cooking”. The expectation in the practice was “Memories-making”, “Experience of happiness”, “Harmony with nature”, “Build healthy human relationships” and “Acquisition of knowledge and technology”. Own acquisition target was “Basic technique” and “Safe procedure”.
2. A new problem was a discovery of the method of thoroughly improving student's knowledge and technologies.
3. Student's leadership was extent to be able to do “Life guidance” and “Standard program”.
4. The factor analysis has extracted the following six factors. “Mutual guidance and Consideration”, “Charge program and Satisfaction”, “Inspiration and Commitment”, “Health condition and Stability”, “Appropriate amount of activity” and “Guidance of program and Uneasiness”.
5. The attitude to the student's outdoors activities has changed independent and positively. The practice gave the good influence to student's “Standpoint and Attitude”. The practice was effective in “Understanding and Goodwill” to nature.

緒 言

指導者養成としての授業「キャンプ実習」のあり方の解明には、正確で適切な評価方法の構築と、縦断的・横断的な調査・研究の蓄積が必要であると考え、一連の研究に着手した。研究目的に、養成課程に存在する組織、指導者、実習生、プログラム、施設・設備の質的向上に関わる問題解決を置き、主な研究方法を、①診断的評価方法、②形成的評価方法、③総合的評価方法の3点を解明することとして、複数年にわたる継続研究を予定した¹⁾。

第1報・第2報で報告するに至った傾向は、1)参加学生は、経費が安価であることを第一条件に実習選択をし、単位取得と基本的体験を参加目標に、日頃体験できない活動をとおして、友人と時や楽しさを共有したいという傾向がうかがわれた。強い達成欲や技術習得欲は感じられず、2ヶ年を通じほぼ同様の傾向がうかがえた²⁾³⁾。2)少なくとも1人2~3回程度のキャンプ経験があり、野外調理に必要な基礎技術は半数以上が体得していると2ヶ年ともに判断できた。また、個人準備・協同準備に際しての積極性、オリエンテーションや実習要項の有効作用、環境適応能力の一様性、実習直前の期待度の高さ、キャンプに対する知識・技術や実習における役割・研究に関する学習不足・準備不足が両年ともに観察された²⁾³⁾。3)実行力と指導力に関する自己評価では、いずれに関しても得手不得手の順位に大きな差はないことが判明した。生活指導を行う班担当インストラクター程度の活動は可能であるが、各プログラムを主任となって運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持つまでには至っていない傾向がうかがえた。体験だけではなかなか得られない知識や自信を如何に向上させることができるかという体験の増量方法や知識の拡幅方法が、現在のキャンプ実習スタイルの課題と推測された²⁾³⁾。4)満足感・達成感を構成する要因について検討した結果、実習の成否および今後の研究のポイントをにぎるであろう因子は、第1報で「安定と安心」「交流と相互指導」「積極性と達成欲」「触発と参加意欲」「健康状態」「集団生活への適応」の6つを、第2報で「義務や責任の遂行」「交流と自己の満足感」「公平と民主」「自己の健康状態」「心身の安定」「実習の適切さ」の6つを抽出することができた。2ヶ年の比較から、実習の成否および今後の研究の鍵となる要因は、「民主・公平のもとでの義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」であると予測した²⁾³⁾。5)野外活動については、活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していること、共同活動については、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていることが両年ともに予測され、キャンプ実習自体の効果と判断された。自然についての項目の回答傾向からは、「安らぎ」「楽しさ」「心地よさ」「魅力的」「優しさ」「調和的」「大切さ」の項目で2ヶ年に差がみられた²⁾³⁾ことなどであった。

第3報となる今回は、3ヶ年の基礎的資料収集による比較検討から、3実習間に存在する普遍部分の解明を目標とし、実習形態変更後に予定している評価と比較検討できるような、最終的総合評価を得ようとするものである。

方 法

1. 実習の概要と分析の対象

(1) 実習の概要

本年度の実習は、目的・目標、システム、担当指導教員、場所、期間等のほぼ全てを昨年までと同様⁴⁾とし、時期のみ学年暦の関係から7月5日から7月9日の4泊5日に変更して実施した(Table 1.)。

(2) 分析の対象

分析の対象者は、大学・短大ともに2年生で開講されている「キャンプ実習」という選択必修科目を、平成17年度に履修した118名の学生である。そのうち有効回答として今回の研究に採用したのは、欠席、無効回答を除く111名であった。

2. 調査の内容と方法

(1) 調査内容

調査内容は昨年度とまったく同様とし、〔事前調査〕と〔事後調査〕の2回を計画した⁵⁾。

(2) 調査方法

調査方法も昨年同様、集合調査方法を用いた記名方式で実施した⁶⁾。

3. 分析の内容と方法

今回の研究は、過去2回の研究との比較研究である。実施年度や参加学生に関わらず、実習自体から得られる純粋な貢献量を測定したいため、「参加者の意識・行動・学習・達成レベル」に焦点をあてた分析の内容や方法については、昨年度までと全く同一にして実施した⁷⁾。

Table 1. キャンプ実習の日程・日課

TIME	1日	2日		3日		4日		5日
	出発準備	起床		起床		起床		起床
7:00	学生集合	朝の集い		朝の集い		朝の集い		朝の集い
8:00	大学出発	朝食		朝食		朝食		朝食
9:00		Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	奉仕活動
10:00			O・L 学習会	スポーツ 活動	ロープワーク ハンドクラフト	O・L 学習会		閉講式
11:00								現地出発
12:00	昼食	登山 (昼食)		昼食			登山 (昼食)	昼食
13:00			O・L (昼食)	ロープワーク ハンドクラフト	スポーツ 活動	O・L (昼食)		
14:00	現地到着			自然探索				
15:00	開講式			自由行動				
16:00	環境整備							大学到着
17:00	夕食	夕食	入浴	夕食	入浴	入浴	夕食	備品整理
18:00	入浴	入浴	夕食	入浴	夕食	夕食	入浴	解散
19:00	オリエンテーション	星座観察		歌唱・フォークダンス		キャンプファイヤー		
20:00								
21:00	班長会議	班長会議		班長会議		班長会議		
22:00	消燈	消燈		消燈		消燈		

結果と考察

1. 参加理由と習得目標

実習参加理由については、「参加料金の安さ」「単位の関係」の2項目が昨年までと同様に上位回答項目となった。新たな回答傾向は、「キャンピングの知識や技術の向上」が今年初めて上位に順位付けされたことである(Table 2.)。期待するプログラムでは、「野外調理」「星座観察」「キャンプファイヤー」「登山」が昨年までと全く同様に上位回答項目となった。30%以上の回答率を得た項目についても、「野外調理」と「星座観察」の2項目となり、3ヶ年の変化は認められなかった(Table 3.)。

今年の参加学生も、参加料金の安さと単位取得を優先した実習選択をし、日常、擬似的にでも体験することが困難な活動をとおして、友人と楽しみを共有したいとする立場を根本的にはとっていることに変わりはない様であるが、何かを達成したい、技術を習得したいという意欲は、前年までと比較してかなり高いことが判明した。

キャンプ実習に対する期待については、「自然とのふれあい体験」「楽しさの体験」「思い出づくり」「キャンピングの知識・技術の習得」が上位回答項目となり、昨年まで高い回答率であった「友達との人間関係づくり」への回答率は極端に下がっていた。また、「指導力の向上」は、今年も下位にランキングされた(Table 4.)。習得目標については、「基本技術」「共同生活のあり方」は今年も上位にランクされたが、次に

高回答率で続いたのは「指導方法」「計画・実施方法」であった。「ルール・マナー」の回答率に大きな変化はないが、「安全な方法」については、今年に限って回答率が10%を割り込んだ(Table 5.)。

項目	N=111	%
1. 単位の関係上	48.65	
2. 参加料金が安い	45.95	
3. キャンピングの知識や技術の向上	25.23	
4. キャンプが好き	20.72	
5. 友達といきたかった	17.12	
6. キャンプをしたことがない	13.51	
7. 学科の実習で安心	13.51	
8. キャンピングの指導力向上	12.61	
9. 新たな友達ができそうだった	11.71	
10. その他	6.31	
11. 大学教員の引率・指導	2.70	
12. 不明	0.90	

項目	N=111	%
1. 野外調理	44.14	
2. 星座観察	44.14	
3. キャンプファイヤー	29.73	
4. 登山	24.32	
5. オリエンテーリング	19.82	
6. スポーツ活動	15.32	
7. ハンドクラフト	13.51	
8. ロープワーク	12.61	
9. テントの設営・撤収	11.71	
10. 歌唱	5.41	
11. フォークダンス	4.50	
12. 不明	1.80	
13. その他	0.90	
14. 朝の集い	0.00	
15. 奉仕活動	0.00	
16. 開・閉講式	0.00	

項目	N=111	%
1. 自然とのふれあい体験	71.17	
2. キャンプの楽しさを体験	60.36	
3. 思い出づくり	49.55	
4. キャンピングの知識・技術の習得	46.85	
5. 友達との人間関係づくり	39.64	
6. キャンピングの指導力の向上	25.23	
7. その他	3.60	
8. 不明	2.70	

項目	N=111	%
1. 基本的なキャンピング技術	73.87	
2. 野外における適切な共同生活のあり方	40.54	
3. キャンピングの指導方法	24.32	
4. 各プログラムの計画・実施方法	24.32	
5. 自然と共生するためのルール・マナー	23.42	
6. 安全なキャンピングの方法	9.01	
7. その他	1.80	
8. 不明	1.80	

本年度参加の学生たちの回答傾向は、実習経費が安価であることを第一条件に、単位取得と基本的体験に参加目標を置き、自然が豊富な環境でしか体験できないことをとおして、友人と時や楽しさを共有したいという過去2ヶ年と同様な部分と、本学キャンプ実習が本来目標としたい、何かを習得する授業、自己の能力を向上させる授業として捉えようとしている部分の2面性がうかがえた。3ヶ年の継続調査により、実習に対する取り組み方や積極性については、学年間においてややレベル差のあることが明らかとなった。

3ヶ年を総合的にみても、参加理由においては「参加料金の安さ」「単位の関係」が、期待しているプログラムについては「星座観察」「野外調理」が、参加時に期待していることについては「思い出づくり」「楽しさの体験」「自然とのふれあい体験」「友達との人間関係づくり」「キャンピングの知識・技術の習得」が、自己の習得目標については「基本技術」「安全な方法」が、普遍部分として捉えられることが予測された。

2. 経験・技術と事前学習の自己評価

本年度参加学生のキャンプ経験については、家族や友人とのキャンプ経験が非常に増加しているが、逆

に、高校までの学校や団体における経験量は著しく減少している傾向がうかがえた(Table 6.)。また、キャンプ技術の自己評価についても、刃物の使用やテント設営の技術向上がみられ、過去2ヶ年の結果とは異なり、野外調理に関わる技術低下が明らかとなった(Table 7.)。

少なくとも1人2~3回程度のキャンプ経験があり、野外調理に必要な基礎技術は誰しもが体得していると結論した昨年までとは異なり、本年度参加学生の経験・技術傾向については、キャンプ参加量は過去2ヶ年と比較して豊富になりつつも、技術経験量は、家族や友人との体験量増加の影響からかごく限定されたものへと変化していることが予測された。

Table 6. キャンプ経験 N=111

項 目	%
1. 大学の宿泊研修で経験	63.06
2. 家族とのキャンプ経験	50.45
3. 友人とのキャンプ経験	32.43
4. 初めて	12.61
5. 高等学校までの林間学校で経験	11.71
6. 地域でのキャンプ経験	9.91
7. ガールスカウトでの経験	2.70
8. キャンプのリーダーを経験	1.80
9. キャンプ関係の団体に所属	1.80
10. YMCA などでのキャンプ経験	0.90
11. その他	0.90
12. 不明	0.00

Table 7. キャンプ技術 N=111

項 目	%
1. 刃物の安全な使用	48.65
2. 野外調理	45.95
3. テントの設営・撤収	43.24
4. かまど造り	22.52
5. 飯盒(コッヘル)炊飯	19.82
6. 方位・距離・地図	18.92
7. マキでの火おこし	13.51
8. 天気図・気象予測	1.80
9. 食用植物の採取と調理	1.80
10. 不明	0.90
11. ロープワーク	0.90

事前の準備や学習の量、オリエンテーションや要項等の作用、適応能力や期待の程度については、昨年までと全体的によく似た回答傾向を示した。今回指摘されるような新しい傾向としては、「準備段階における班員とのコミュニケーション」「オリエンテーションや実習要項の有効作用」の2項目で回答ポイントの上昇がみられたことである(Table 8.)。

過去2ヶ年については、キャンプに対する知識・技術やキャンプ実習における役割・研究などに関する事前の学習や準備の不足は否めないと判定し、事前学習に関する方法の再考と時間の確保を急務な課題とした。本年についてもほぼ同様なことがいえるとともに、経験回数は増えているものの経験の深さはまちまちであるといえそうである。オリエンテーションや実習要項を参考にし、班員とのコミュニケーションから一様性を導き出そうとしている傾向がうかがえる。

Table 8. 事前の自己評価

N=111(%)

項 目	5	4	3	2	1	不明
1. 準備段階における班員とのコミュニケーション	28.83	45.95	18.02	3.60	1.80	1.80
2. 個人の知識や技術に関する事前学習	0.00	7.21	33.33	33.33	24.32	1.80
3. 役割担当に関する事前の学習や準備	0.90	18.92	40.54	34.23	3.60	1.80
4. 個人的用具の準備	6.31	37.84	45.05	5.41	3.60	1.80
5. オリエンテーションや実習要項の有効作用	16.22	45.95	35.14	0.90	0.00	1.80
6. 個人の環境変化の対する適応能力	9.91	19.82	60.36	8.11	0.00	1.80
7. キャンプ実習直前の期待	21.62	21.62	39.64	9.01	6.31	1.80

※ 5=とても高次, 4=やや高次, 3=平均的, 2=やや低次, 1=とても低次

3ヶ年の結果を総括すると、年ごとに特徴はあるものの、過去2ヶ年の結論と大きく異なる傾向はみられないといえ、事前学習に関する方法の再考と時間の確保は重要な課題といえる。ただ、本実習前までのキャンプ経験の仕方に時代変化からの影響が含まれているようであり、学生たちが実習に望むにあたって自覚しておかなければならない一様性についての検討が、新たに必要とされよう。

3. 実行力と指導力の獲得

実習で行われた各プログラムについて、自分自身の実行力と指導力に関して自己評価をしてもらった。評価は、本年も「とても自信がついた」から「まったく自信がない」までの5段階評価とした(Table 9.)。

Table 9. 実行力と指導力の自己評価

N=111

項 目	実行力		指導力		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
4. 飯盒炊飯	4.15	0.77	4.12	0.76	0.576	
16. キャンプファイヤー	4.14	0.93	3.82	0.96	4.356	***
15. フォークダンス	4.12	0.92	4.00	0.92	1.575	
5. 野外調理	4.07	0.82	4.05	0.80	0.419	
13. スポーツ活動	4.04	0.89	3.90	0.87	1.882	*
25. 奉仕活動	4.03	0.85	3.76	0.92	3.428	***
8. 登山	4.02	0.88	3.62	0.87	4.553	***
6. 刃物(ナイフ・ナタ等)の使用	4.01	0.96	3.95	0.97	1.044	
14. 歌唱	4.01	0.93	3.85	0.98	2.331	*
7. 朝の集い	4.00	0.91	3.89	0.88	1.463	
3. 火おこしとマキの組み方	3.99	0.96	3.96	0.98	0.456	
17. 野外ゲーム	3.95	0.95	3.77	0.93	2.407	**
10. 星座観察	3.87	0.92	3.53	0.94	4.056	***
18. スタンツ(寸劇)	3.80	1.04	3.55	1.08	3.024	**
9. オリエンテーリング	3.75	1.05	3.66	0.87	1.079	
2. テントの管理	3.73	0.84	3.62	0.84	1.509	
1. テントの設営・撤収	3.72	0.69	3.56	0.86	2.125	*
12. ハンドクラフト	3.68	0.87	3.48	0.93	2.622	**
19. 方位の判定	3.64	0.97	3.36	1.10	3.628	***
24. 自然観察	3.61	0.89	3.32	1.06	3.238	***
21. 地図	3.56	0.96	3.25	0.99	4.000	***
11. ロープ結策法	3.43	0.97	3.08	1.02	4.959	***
20. 距離の測定	3.20	1.02	3.07	1.11	1.556	
22. 天気図	2.83	0.89	2.77	0.92	0.847	
23. 気象予測	2.68	0.80	2.70	0.89	-0.436	

*:P<0.05 ** :P<0.01 ***:P<0.001

昨年までと同様に上位項目に着目すると、実行力・指導力ともに上位にランクされ一致したのは、「野外調理」「飯盒炊飯」「スポーツ活動」「刃物(ナイフ・ナタ等)の使用」「朝の集い」の5項目であった。「火おこしとマキの組み方」「奉仕活動」「登山」については、平均値は下げたものの今年も上位にランクされていた。昨年までと比較して特異であったのは、「キャンプファイヤー」「フォークダンス」「歌唱」の項目が上位にランクされたことである。上述のとおり、キャンプ経験の仕方に明らかな変化が起こっており、楽しみ方の仕方は実習前より身につけてきていることが推察できよう。

平均値の差の比較からは、指導力の評価が実行力の評価を上回った項目は、「気象予測」の1項目のみであったが、有意差は認められず、その他の項目はすべて指導力の評価が下回った。

昨年までと比較して、実行力・指導力のいずれに関しても得手不得手に大きな差はないと判断されるが、

班を担当し生活指導を行うインストラクター程度の活動に加えて、ごく一般的に実施されている組織キャンプに組み込まれるプログラム程度ならば、初歩的に運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持つまでに至っている可能性がうかがえた。

3ヶ年を総合して評価順位をみると、「野外調理」「飯盒炊飯」「スポーツ活動」「火おこしとマキの組み方」「刃物(ナイフ・ナタ等)の使用」「登山」「朝の集い」「フォークダンス」「奉仕活動」「歌唱」の10項目が、実行力・指導力ともに上位にランクされ、逆に、「野外ゲーム」「テントの設営・撤収」「ロープ結策法」「スタンツ(寸劇)」「地図」「自然観察」「星座観察」「距離の測定」「天気図」「気象予測」の10項目が下位にランクされた。この結果から、現在のキャンプ実習のスタイルでは、生活指導インストラクター程度や一般的プログラムの運営・指導程度ならば、実行力・指導力の獲得も可能ではあるが、知識や技術の量が獲得されなければ実行・指導が不可能なプログラムについては、時間的制約を解消していく必要性が指摘されよう。2~3回のキャンプ経験プラス本学科キャンプ実習参加程度では得られない、知識や自信を獲得させられるだけの物理的時間確保が、新たな問題として浮上した。

4. 満足感・達成感を構成する要因

満足感・達成感を構成する要因について因子分析を行ない検討した。

分析は、主因子法を用い、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転実施の後、因子構造を得た。因子数の決定は、基本的に因子の固有値が1.0以上のものとしつつ、スクリーカーブを参考に行なった結果、昨年までと同様に6因子を得ることとした(Table 10.)。因子の解釈および命名は、回転後の因子負荷量が0.5以上の項目に着目し、松田の研究⁸⁾と昨年までの研究⁹⁾¹⁰⁾を参考に行った。

第1因子は、1.「グループ生活によく適応したか」、24.「積極的に話し合いに参加し発言できたか」、23.「友人と仲よく生活できたか」、10.「指導力は十分発揮されたか」、14.「積極的に協力して仕事をしたか」、9.「積極的に指導しあったか」、8.「自分の意見が友人に理解されたか」、2.「専門的な知識と技能は発揮されたか」、3.「参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか」、11.「新しい友人ができたか」、22.「共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか」、22.「共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか」、35.「共同生活者や友人の健康に気を配れたか」、20.「参加者と接触の機会は多かったか」、18.「責任感と義務遂行力は高かったか」、4.「身のまわりの清潔・整頓は良く行われたか」、21.「担当プログラムに創意工夫がなされたか」、15.「創意工夫して、仕事をなし遂げたか」、28.「協同精神の発揮はできたか」、34.「友人と協力することができたか」などの項目の因子負荷量大きい。因子を代表する項目内の主要なキーワードは、「適応」「積極的」「仲よく」「協力」「指導」「理解」「発揮」「担当プログラム」「友人」「清潔・整頓」「健康」「接触」「責任」「義務」「遂行」「創意工夫」「共同精神」などであり、これらから、共同生活の中で自分に課せられた担当や役割をよく認識し、自己の義務や責任をよりよく遂行しつつも、共同生活者に対する配慮の姿勢がうかがえる。よって、この因子を「相互指導と配慮」と命名した。

第2因子は、27.「自然観察は楽しかったか」、45.「キャンプソングは楽しかったか」、39.「担当プログラムは民主的に運営されたか」、12.「担当プログラムに興味と欲求は満たされたか」などの項目の因子負荷量大きい。因子を代表する項目から、楽しいという満足感の高まりと、各班が研究課題として担当したプログラムに対する興味の高まりや欲求充足の様子がうかがえることから、この因子を「担当プログラムと満足感」と命名した。

第3因子は、47.「野外活動は楽しかったか」、48.「日数や時期はよかったか」、50.「機会があればまた参加したいと思うか」、49.「実習は得るところが大きかったか」、46.「これからもやりたいことが見つかったか」などの項目の因子負荷量大きい。実習に触発され、活動を肯定的に捉え、参加意欲が向上していることが強く感じられることから、「触発と参加意欲」と命名した。

第4因子は、25.「実習期間中の健康状態はよかったか」、16.「実習中病気をしなかったか」、40.「民主的な生活が実行されたか」の項目の因子負荷量大きい。明らかに自分自身の健康状態と安定した生活のことを指し示す事柄であることから、「自己の健康状態と安定」と命名した。

第5因子は、43.「諸活動は自分の身体に無理なく行えたか」、42.「睡眠は十分だったか」の項目の因子負荷量大きい。この2項目だけでは解釈することが難しいため、2項目に続き比較的因子負荷量の高い項

Table 10. 達成感の構成因子

N=111

質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	Mean	S.D.
1. グループ生活によく適応したか	0.723	-0.172	-0.253	0.122	0.203	0.007	4.03	0.85
24. 積極的に話し合いに参加し発言できたか	0.714	-0.200	-0.128	0.260	0.110	-0.062	4.05	0.91
23. 友人と仲よく生活できたか	0.691	-0.258	-0.227	0.142	0.167	-0.141	4.30	0.82
10. 指導力は十分発揮されたか	0.686	-0.157	-0.199	0.066	0.083	0.411	3.45	0.90
14. 積極的に協力して仕事をしたか	0.685	-0.204	-0.246	0.076	-0.206	0.027	4.28	0.85
9. 積極的に指導しあったか	0.684	-0.087	-0.306	-0.085	0.049	0.304	3.74	0.95
8. 自分の意見が友人に理解されたか	0.652	-0.118	-0.205	-0.001	0.065	0.340	3.60	0.86
2. 専門的な知識と技能は発揮されたか	0.632	-0.173	-0.121	0.238	0.126	0.119	3.67	0.81
3. 参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか	0.627	-0.223	-0.222	0.115	0.096	0.170	3.55	0.97
11. 新しい友人ができたか	0.614	-0.264	-0.167	0.077	-0.073	-0.066	4.24	0.88
22. 共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか	0.599	-0.025	0.010	0.107	0.186	-0.115	3.79	0.97
35. 共同生活者や友人の健康に気を配れたか	0.589	-0.227	-0.233	0.398	0.040	-0.154	4.09	0.92
20. 参加者と接触の機会は多かったか	0.537	-0.251	-0.179	0.148	-0.074	0.310	3.78	1.07
18. 責任感と義務遂行力は高かったか	0.535	-0.344	-0.345	0.217	0.192	0.064	4.10	0.83
4. 身のまわりの清潔・整頓は良く行われたか	0.528	-0.027	-0.048	-0.146	0.276	0.065	3.72	0.95
21. 担当プログラムに創意工夫がなされたか	0.522	-0.496	-0.079	0.098	0.052	0.178	3.89	0.93
15. 創意工夫して、仕事をなし遂げたか	0.518	-0.263	-0.320	0.282	0.041	-0.070	4.28	0.80
28. 協同精神の発揮はできたか	0.515	-0.521	-0.382	0.099	-0.090	0.055	4.12	0.85
34. 友人と協力することができたか	0.507	-0.328	-0.312	0.394	0.010	-0.271	4.50	0.71
27. 自然観察は楽しかったか	0.143	-0.672	-0.237	0.098	-0.035	0.041	4.23	0.85
45. キャンプソングは楽しかったか	0.232	-0.576	-0.180	0.111	0.176	0.070	4.38	0.83
39. 担当プログラムは民主的に運営されたか	0.387	-0.528	-0.026	0.412	0.368	0.113	4.04	0.87
12. 担当プログラムに興味と欲求は満たされたか	0.317	-0.508	-0.271	-0.021	0.084	0.237	3.87	0.89
47. 野外活動は楽しかったか	0.328	-0.255	-0.742	0.169	0.000	-0.019	4.24	0.80
48. 日数や時期はよかったか	0.211	-0.199	-0.697	0.152	0.113	0.163	3.69	1.11
50. 機会があればまた参加したいと思うか	0.225	-0.035	-0.649	0.030	0.207	0.113	3.30	1.22
49. 実習は得るところが大きかったか	0.224	-0.288	-0.641	0.283	0.146	-0.027	4.25	0.80
46. これからもやりたいことが見つかったか	0.169	-0.295	-0.573	0.259	0.138	0.158	3.76	0.92
25. 実習期間中の健康状態はよかったか	0.154	-0.068	-0.261	0.718	0.222	0.031	4.26	1.03
16. 実習中病気をしなかったか	0.021	-0.072	-0.373	0.706	0.095	0.004	4.45	1.04
40. 民主的な生活が実行されたか	0.320	-0.462	-0.081	0.510	0.377	0.171	4.04	0.83
43. 諸活動は自分の身体に無理なく行えたか	0.276	-0.207	-0.365	0.056	0.523	0.046	3.92	1.02
42. 睡眠は十分だったか	-0.022	-0.029	-0.128	0.106	0.522	-0.033	4.11	1.01
30. 担当プログラムに不安なところはなかったか	0.056	-0.394	-0.155	0.147	0.149	0.510	3.75	0.93
6. 不平不満はなかったか	0.493	-0.119	-0.276	0.001	0.381	0.219	3.35	1.04
29. 参加者を平等に取り扱うことはできたか	0.482	-0.441	-0.137	0.305	0.012	0.189	4.13	0.85
37. 公平で親切であったか	0.433	-0.472	-0.075	0.439	0.248	-0.045	4.00	0.85
13. 食べ物について好き嫌いはなかったか	0.430	-0.078	-0.268	0.131	-0.341	0.244	3.92	1.28
5. 定められた規則が守られたか	0.401	-0.231	-0.185	-0.048	0.237	0.068	4.17	0.80
41. よい習慣はついたか	0.390	-0.365	-0.383	0.163	0.290	-0.168	4.12	0.91
38. 参加者の保健安全面に十分留意したか	0.390	-0.423	0.068	0.365	0.462	0.111	3.84	0.89
31. 野外活動の一般的知識を得たか	0.386	-0.182	-0.173	0.280	0.261	-0.017	4.36	0.68
19. 食事はよく食べられたか	0.288	-0.255	-0.345	0.138	0.074	0.043	4.64	0.78
33. 野外活動は健康のためよかったと思うか	0.282	-0.465	-0.322	0.117	0.115	-0.129	4.13	1.03
32. 恥ずかしくなかったか	0.278	-0.334	-0.294	0.091	0.148	0.140	4.05	1.12
17. ゲームやスポーツは楽しかったか	0.225	-0.492	-0.400	0.156	0.088	0.127	4.52	0.82
44. 意地悪をしなかったか	0.217	-0.233	0.004	0.141	0.388	0.176	4.20	1.04
7. 疲労しなかったか	0.096	0.105	-0.275	0.111	0.422	0.337	2.72	1.19
26. 実習中けがをしなかったか	0.049	-0.233	-0.034	0.430	0.007	0.269	4.50	0.86
36. ハンドクラフトは楽しかったか	-0.020	-0.330	-0.087	0.150	0.324	-0.031	3.94	0.94
2乗和	9.755	5.018	4.707	3.260	2.601	1.599		
寄与率(%)	19.51	10.04	9.41	6.52	5.20	3.20		

目にも着目した。「保健安全」「疲労」などのキーワードが浮かび上がり、実習諸活動の質や量が自分の体力にとって適切であったかどうかを判断しているような項目に、因子負荷量が高いことが明らかとなったため「活動量の適切さ」と命名した。

第6因子は、30.「担当プログラムに不安なところはなかったか」の項目の因子負荷量大きい。担当したプログラムはほぼ全員が初めての経験であっただろう。不安を持って準備・実施したことがうかがえる。よって、「プログラム指導と不安」と命名した。

各年の分析結果から、第1報で、「安定と安心」「交流と相互指導」「積極性と達成欲」「触発と参加意欲」「健康状態」「集団生活への適応」の6要因、第2報で、「義務や責任の遂行」「交流と自己の満足感」「公平と民主」「自己の健康状態」「心身の安定」「実習の適切さ」の6要因、第3報で、「相互指導と配慮」「担当プログラムと満足感」「触発と参加意欲」「自己の健康状態と安定」「活動量の適切さ」「プログラム指導と不安」の6要因が抽出されたことになり、重要となるキーワードは、全ての実習において抽出された要因内に含まれていることが明らかとなった。3ヶ年を総合した分析からは、「相互指導と配慮」、「公平と民主」、「触発と参加意欲」、「共同生活」、「自己の健康状態」、「活動量の適切さ」の6要因が抽出され、第2報で指摘した実習の成否および今後の研究のポイントをにぎるであろう、「民主・公平のもとの義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」の6要因を示唆するものと判断された。

5. 自然・野外活動に対する意識変化

岸ら¹¹⁾が作製した「自然活動実習アンケート」を本年も実施し、実習前後の回答傾向の違いについて検討した(Table 11.)。

Table 11. 自然や野外活動に対する意識の変化 N=107

項目	実習前		実習後		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
＜自然について＞						
1. 自然の中では気持ちが安らく	4.27	0.77	4.35	0.83	-0.954	
2. 自然の中では楽しい気持ちになる	4.15	0.79	4.23	0.85	-0.833	
3. 自然の中は心地よい	4.33	0.77	4.34	0.83	-0.109	
4. 自然は変化に富み魅力的だ	4.02	0.85	4.19	0.88	-1.789	*
5. 自然は人間の力を超えた偉大なものだ	4.41	0.71	4.60	0.64	-2.936	**
6. 自然は優しい	3.57	0.98	3.86	1.03	-2.745	**
7. 自然は調和的だ	3.63	0.89	3.93	0.95	-3.684	***
8. 自然はなくてはならない大切なものだ	4.75	0.51	4.80	0.44	-1.061	
9. 自然を積極的に守っていききたい	4.54	0.64	4.59	0.61	-0.799	
10. できるだけ自然と接する機会を持つようにしたい	4.23	0.75	4.48	0.72	-3.571	***
＜野外活動について＞(野外活動は、)						
11. 心や身体の緊張をほぐしてくれる	3.44	1.01	3.76	1.06	-2.884	**
12. 未知の体験を味わう喜びや楽しみが多い	3.83	0.97	4.16	0.92	-3.786	***
13. 他人と心を通わす良い機会だ	4.00	0.90	4.33	0.88	-3.826	***
14. 自主的に考え積極的に活動する意欲をかきたてる	3.75	0.87	4.17	0.92	-5.013	***
15. チャレンジ精神やたくましい精神力を養うことができる	3.90	0.86	4.39	0.89	-6.260	***
16. 助け合い、協力し合う態度を身につけさせてくれる	4.22	0.81	4.46	0.78	-3.158	**
17. 深い感動を与えてくれる	3.85	0.83	4.15	0.94	-3.045	**
18. 創造性に富んでいる	3.66	0.87	4.06	1.00	-3.948	***
19. 規律のある生活態度を身につけさせてくれる	3.81	0.90	4.19	0.95	-4.059	***
20. 自分自身を見つめ直すよい機会だ	3.59	0.90	4.05	1.00	-4.895	***
＜共同活動について＞(他者との協同活動は、)						
21. よろこびや楽しみを与えてくれる	3.84	0.93	4.24	0.86	-5.048	***
22. 安心感を与えてくれる	3.48	0.85	3.86	0.97	-4.455	***
23. 大きいことを成し遂げさせてくれる	4.02	0.84	4.26	0.89	-2.709	**
24. いろいろな知識や技術を得させてくれる	4.04	0.76	4.32	0.84	-3.321	***
25. 自分の力を引き出してくれる	3.65	0.84	4.03	0.94	-4.559	***
26. いろいろな考え方を学ばせてくれる	4.09	0.77	4.36	0.77	-3.261	***
27. 自分の責任や役割を自覚させてくれる	4.15	0.73	4.33	0.77	-2.308	*
28. 他者の存在のありがたみを感じさせてくれる	4.16	0.78	4.31	0.80	-1.628	
29. ルールやマナーの大切さを実感させてくれる	4.09	0.77	4.40	0.79	-3.326	***
30. 互いの立場の理解を促してくれる	3.90	0.83	4.23	0.79	-3.533	***

*:P<0.05 ** :P<0.01 ***:P<0.001

結果、30項目全ての平均値が向上しており、《自然について》の質問項目では10項目中5項目に、《野外活動について》の質問項目では10項目中10項目に、《共同活動について》の質問項目でも10項目中9項目に、有意な差を持った向上傾向がうかがわれた。

《野外活動について》の各項目の回答傾向から、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していることが予測されること、また、《共同活動について》の各項目の回答傾向からは、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていることが予測されることは、キャンプ実習自体の効果として昨年までに明らかにしたことと、全く同様と判断した。

3ヶ年の総合分析でも、各年の傾向とほぼ同様のことが言え、《自然について》の3.心地よい、8.大切なものだ、9.積極的に守るの3項目以外、有意な差を持った向上傾向がうかがわれた。

第1報では2つの解釈を示し判定の難しさを指摘したが、第2報・第3報そして総合評価を勘案すると、「本実習のスタイルでも、自然に対する理解や好意に関する面への効用は充分期待できる」と結論できよう。

まとめ

研究目的に、養成課程に存在する組織、指導者、プログラム、施設・設備、実習生に関わる質的向上の問題解決を置き、継続研究を予定した。

第3段階となる今回は、3ヶ年の比較検討と3ヶ年を総合した検討を実施した。最大の目標は、昨年までと同様、各実習に存在する最大公約数の解明である。結果から以下のことを指摘し、まとめとする。

1. 参加理由においては「参加料金の安さ」「単位の関係」が、期待のプログラムについては「星座観察」「野外調理」が、参加時の期待については「思い出づくり」「楽しさの体験」「自然とのふれあい体験」「友達との人間関係づくり」「キャンピングの知識・技術の習得」が、自己の習得目標については「基本技術」「安全な方法」が、普遍部分として捉えられることが予測された。過去2ヶ年と同様な部分と、何かを習得する授業、自己の能力を向上させる授業として捉えようとしている部分の2面性がうかがえ、実習に対する取り組み方や積極性については、学年間においてややレベル差のあることが明らかとなった。
2. キャンプに対する知識・技術や、キャンプ実習における役割・研究などに関する事前の学習や準備の不足については、年ごとに特徴はあるものの、否めないと事実と判定でき、事前学習に関する方法の再考と時間の確保は重要な課題といえた。本実習前までのキャンプ経験の仕方に、時代変化からの影響が含まれているようであり、学生たちが実習に望むにあたって自覚しておかなければならない一様性についての検討が、新たに課題とされた。
3. 現在のキャンプ実習のスタイルでは、生活指導インストラクター程度や一般的プログラムの運営・指導程度なら、実行力・指導力の獲得も可能と予測された。しかし、知識や技術の量が獲得されなければ実行・指導が不可能なプログラムについては、知識や自信を獲得させられるだけの物理的時間確保が、新たな問題として指摘された。
4. 今回の因子分析結果からは、「相互指導と配慮」「担当プログラムと満足感」「触発と参加意欲」「自己の健康状態と安定」「活動量の適切さ」「プログラム指導と不安」の6要因が抽出された。3ヶ年を総合した分析からは、「相互指導と配慮」、「公平と民主」、「触発と参加意欲」、「共同生活」、「自己の健康状態」、「活動量の適切さ」の6要因が抽出された。この2つの結果から、昨年までに提言した「民主・公平のものと義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」は、実習成否の鍵を握る重要な要因であると判断した。
5. 《野外活動について》の回答からは、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していること、また、《共同活動について》の回答からは、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていること、《自然について》の回答からは、特に、ルール、マナー、責任、役割、考え方などに多大な好影響を及ぼしていることが予測された。3ヶ年の総合評価を勘案し、「本実習のスタイルでも、自然に対する理解や好意に関する面への効用は充分期待できる」ことが明らかとされた。

文 献

- 1) 中村哲士・保井俊英・會田 宏・小柳好生・田中繁宏・永戸久美・四元美帆・野老 稔, 武庫川女子大学紀要, 52, 66(2004)
- 2) 前掲 1), 74(2004)
- 3) 中村哲士・保井俊英・會田 宏・小柳好生・田中繁宏・永戸久美・四元美帆・野老 稔, 武庫川女子大学紀要, 53, 41-42(2005)
- 4) 前掲 1), 66-67(2004)
- 5) 前掲 1), 67(2004)
- 6) 前掲 1), 67(2004)
- 7) 前掲 1), 68(2004)
- 8) 松田 稔, ザ・キャンプーその理論と實際ー, 創元社, 146-152(1981)
- 9) 前掲 1), 71-72(2004)
- 10) 前掲 3), 38-40(2005)
- 11) 岸 植夫, 自然活動入門ー教養としてのアウトドアー, アイオーエム, 128-131(1992)